

共有される思い出があつてこそだから

お墓はいろいろな私が願つて

結婚のときは一緒でも、お墓に入るときは一緒ではない。

ゆえに、夫婦の間に横たわるお墓の問題はとても複雑だ。

既婚、非婚を問わず、女性にお墓はどんな悩みをもたらしているのか。

女性と家族の問題に取り組んできた上野さんに話を聞いた。

墓は家意識の指標

私たち社会学の分野では、お墓を人々の家意識を測るためのひとつの指標と見えています。とくに家族社会学では、新しく核家族を作った人たち在家意識からどの程度自由になつたかを検証するうえで、墓は有効な検証対象となる。戦後に核家族世帯

の急増期が来て、一九六〇年代から七〇年代にかけて住宅建設ブームが起きましたが、それに引き続いて墓地の大造成ブームが起きました。墓地ブームは「日本では形のうえでは核家族化が起きたが、どうやら、頭の中では旧来の家意識のままだ」ということを測る指標となりました。現在のお墓の主流となつている家の墓、いわゆる先祖代々の墓の歴史

はとても新しく、せいぜい幕末から明治にかけて始まったものだということがわかっていきます。NPO法人エンディングセンター理事長で、東洋大学准教授でもある井上治代さんによれば、この時期、村落共同体が分解して家格の違いが拡大していく過程で登場したのが「先祖代々の墓」。それまでは卒塔婆を立てただけの個人の墓、もしくは共同墓が主流

東京大学大学院教授

上野千鶴子

●うえの・ちづこ 1948年富山県生まれ。京都大学大学院社会学専攻博士課程修了。94年『近代家族の成立と終焉』でサントリー学芸賞受賞。亡き母への思いなどがつづられたエッセイ集『ひとりの午後に』が今年4月に出版され、話題を集めている。

で、個々の家族が家墓を持つようになったのは、庶民の中に「家」の觀念が広がって家に対するこだわりが出てきてからのこと。幕末以降のものなんです。

住宅ブームに引き続いて墓地ブームが起きたのは、次男以下の人たちが都会に出てきたことが要因です。都会で新しく核家族を作った次、三男坊たち、その妻にしてみたら舅や姑がいなくてラッキーという核家族の世帯主たちが、自分たちを「創設分家第一代」と見なしたために墓地需要が増えたわけです。

家を出て自分たちだけの世帯をもった身としては、死んでから長男の家の墓に入るのは男の名折れ。何が何でも創設分家初代の意地で墓を作らなければならないと思っただからこそ、家墓の需要が増えたのでしょう。自分の子どもたちには墓守の役割を

らでしようね。

だから核家族を作った世代が、墓守の実感がないまま今度は自分の子どもたちに「この墓を守ってくれ」と言い出しています。でも守るべき子どもの世代が一人っ子だったり非婚のままだと、頑張つて家の墓を作ったところで後に続く墓守がいない。新しく家の墓を作っても一代か二代で墓守はいなくなっていくでしょう。墓守を望もうにも子どもの数が少なく、しかもその子たちが非婚世代に入っています。墓守を望まれている子どもにとっては、もはや家の墓は重荷以外の何ものでもない。いまでも墓地の広告を目にしますが、少子化時代に入った現在は、墓地ブームも案外早く収束したといえるでしょう。

また、夫は張り切って創設分家のつもりで墓を作ったけれど、妻の側

期待して。団地ブームに次いで墓地ブームが起き、大都市郊外では大規模な墓地造成が進められました。

この時期、お墓のニュータイプが次々と考案され、ロッカー式の墓といったものまで考え出されました。

このままでいったら住宅不足の次は墓地不足の時代になると言われましたが、その後、少子化が始まり、心配は杞憂に終わりました。

八〇年代から九〇年代にかけて、樋口恵子さんが注目すべき発言をしました。「時代はもう墓の統廃合時代に入った」とおっしゃったのです。じつに先見の明をお持ちだったなと思います。少子化時代は長男長女の時代。長男長女や一人っ子どうしが結婚すれば、墓をふたつ以上守らなければなりません。非婚化も増えており、子どもを産んでもその子どもが孫を産んでくれるとは

のお墓に対する意識は複雑です。女性のほうが平均寿命は長いですし、結婚してもしていなくても多くの女性が最後は「おひとりさま」になることを考えれば、夫の家の墓に入りたくないと考える人も当然出てきます。

関西でお墓の研究をした森綾子さんが、既婚女性を対象に「どこのお墓に入りたいか」の調査をしたところ、夫の墓に入りたくない、入るなら実家の墓がいい、別の墓を用意して入りたいと回答した女性が結構いて、これを「死後離婚」と名づけました。ましてやいまは夫婦関係が不安定になっていて、結婚は一生ものではなくなくなってきています。離婚や再婚も増えていますし、家庭内離婚状態の方もいます。

たとえば死別で再婚した女性には「夫の前妻が眠っているお墓には入

かぎりません。樋口さんが言われたとおり、いまは墓守のない墓はどんどん増えていく一方で、墓の統廃合を考えていかなければならない時代になりました。

女性が密かに望む「死後離婚」!?

六〇年代に急激に増加した核家族の世帯主は、次、三男以下の人たちでしたから、実家の先祖代々の墓について墓守の負担を持つことはありませんでした。負担しなかった分、墓守をするとは、どんなことかわからなかったのです。

半面、創設分家意識は強かった。いまだにお墓に関して家意識が根強く残っているのも、男の面子とか、家を成したからには尾羽打ち枯らして長男の墓に入るのは男社会では敗者、という意識が残っているか

りたくない」と考える人もいるでしょうし、嫁姑の関係が悪ければ、「あのお姑さんと一緒の墓は絶対に嫌だ」という人もいる。「嫁いだら婚家が自分の死に場所」と考える女性はだんだん減ってきています。

家族制度は日本の文化伝統といえけれど、私たち家族社会学者の目には、家族のあり方は時代とともにコロコロ変わっていくものに映ります。家族はもとより夫婦関係も、女性の意識やライフスタイルも変わってきている。家の墓があっても入りたくない「死後離婚」を希望する人や、非婚シングルを選択する女性など、ひと昔前とは女性の意識は随分と違っています。

それもあつてか最近では、従来の家や家族の意識にとらわれない個人墓や集合墓も増えて、お墓のメニューは随分と広がりました。